

女性教職員活躍推進だより

第8号 令和6年2月6日 教育庁職員課

★★ 女性管理職ロールモデル紹介 ★★
福島県立いわき光洋高等学校長

齋藤 文子 さん

職員課主幹兼副課長
高橋敏幸が話を伺いました！！

Q:これまでの経歴を教えてください。

大学を卒業後、東白川農商高校（現在の修明高校）に配置され3年間勤務しました。出身地であるいわき市に戻ってからは、勿来高校で10年、平商業高校で7年勤務し、多くの卒業生を送り出しました。子どもたちが頑張ってくれたおかげで、充実した20年でした。そのときの卒業生の中には、現在では親となって本校まで生徒の送迎をしている方もいます。

その後、教育センターへ異動し、初任者研修等の基本研修の企画を行うなど、これまでとは違った新たな経験をした3年間でした。子どもたちがいない職場でしたのでさみしい気持ちもありました。教頭に昇任後は、会津養護学校（会津支援学校）、いわき翠の杜高校、いわき総合高校の3校を経験しました。校長としては、いわき市立藤間中学校で2年、石川高校で3年、現任校が3年目となります。

Q:女性管理職のロールモデルはいましたか？

ロールモデルとなる方は、初任者の頃から身近にたくさんいました。家庭科はほぼ女性で、昇任する方も多かったので、教頭、校長になることは自然なことだと思っていました。



Q:ワークライフバランスの点で工夫したことは？

教頭時代には、週に1回は早く帰り、趣味を楽しんだり、体を動かしたりするようにしていました。休めるときにしっかり休むこと。オンオフの切り替えが大事です。

Q:教頭昇任試験を受けるきっかけは？

教育センターの主任から薦められました。教育センターでは、男女関係なく、昇任試験を受ける流れがありました。



Q:ミドルリーダーの経験は？

主任の経験はないのですが、家庭クラブ東北大会の事務局長を務めるなど、家庭クラブや家庭部会の運営を行ってきました。

Q:教頭のやりがいは？

教頭の時には、先生方とともにやりたいことを実践することができていたので、非常に楽しく充実していました。コミュニケーションがない職場は、個々の先生の個人プレーになってしまいますが、勤務校ではコンセンサスを図りながら、みんなで協力できたので、先生方の考えも広がり、効果的な教育活動が実践できていました。子どもたちが一生懸命取り組み、成長し、輝いている姿を目にすることができたため、やりがいを感じ、もっともっと頑張りたいと思っていました。

Q:逆に大変だったことは？

特別支援学校の時は、福祉の免許は持っていたものの、経験がなかったため、先生方に支えてもらいました。また、どちらの職場でも同じですが、勤務してすぐは先生方との信頼関係を築くのが大変です。しかし、話を重ねることで、先生方とまとまることができたと思います。

Q:校長としてのやりがいは？

最終決断をしなければならないので、大変なことが多いですが、校長として良い決断ができたときは、大きなやりがいを感じます。その際には、先生方も同じ方向性を持って、まとまって取り組んでいくことができます。子どもたちの充実した、多様な学びにつながっていきます。

Q:最後に、女性教職員の皆さんにひとこと。

男性、女性ということではなく、管理職に興味があるなら、やってみるべきだと思います。興味や資質があるのに挑戦しないのは、もったいないことです。女性教職員の割合は増加していますので、挑戦する女性も増えてほしいと思います。女性管理職だからこそ、できることがあります。

齋藤文子さん、
貴重なお話、大変ありがとうございました！
次回の女性教職員活躍推進だよりの発行は、
次年度の5月を予定しています。
令和6年度も、福島県で働く女性教職員の活躍を伝えていきたいと思います。
よろしくお願いします。



～女性教職員活躍推進だよりの発行に当たって～

福島県教育委員会は、女性が職場においてその力を発揮できるよう、「女性教職員活躍推進プラン」を策定し、教職員のニーズに即した女性活躍のための対策を計画的に推進します。また、男女共同参画の実現に向けて、人事の公平性・公正性を確保しつつ、女性教職員の管理職への登用に努めることで、令和7年度までに、女性管理職の割合を教頭・副校長で15%、校長で13%とすることを目標としています。